石川達三
作品集
23

# 若き日の倫理

石川達三

新潮社版

若き日の倫理
石川達三作品集第二十三巻
昭和四十八年六月二十日印刷
昭和四十八年六月二十五日発行
定価七〇〇円
著者　石川達三
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(260)一一一一
振替東京八〇八番
印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
装画　下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1973 Tokyo
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

# 目次


聖市戯歌 7
深海魚 29
豺狼 51
蔦葛 83
少年記 101
あんどれの母 119
雪の宿 129
春蛇 143

盲目の思想 163
虹と蝸牛の室 169
鳳青華 181
流離 193
若き日の倫理 215
三代の矜恃 247
青春の奇術 275
五人の補充将校 289
恩給先生と不良学生 303

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伴奏のある風景　319
交通機関に就いての私見　343
使徒行伝　357
航海日誌　403
群島日誌　417
赤虫島日誌　431
感情架橋　447

仮の棲家 463
女学生の食慾 479
空襲奇談 489
一家創立 495
誰でもがする事 515
解題 久保田正文 527

# 若き日の倫理

# 聖市戲歌

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# サン・パウロの詩人

忘れられた、南のはて……

北方文明を風の便りに聞きながら、勝手気儘な欲情の夜毎々々、冴え冴えとした山上の空気の上に、南十字星の美しき輝きを見る、高原の都市、サン・パウロ。驕奢のまち、恋のまち、そして珈琲のまち。ここでは恋は大っぴらで、飯を食うようにおしゃれをし、煙草を買うように富籤を買う。現実は夢の如くに華やかであり、夢は、現実のままに鮮やかである。

日中はさすがに暑い。だから、日の落ちると共に、全市を挙げて散歩の時間が始まる。それは市街にネオンの灯が入ると共に、忽然として開く南国の夜の花である。

サン・ベント街のレストオランから、夕食を終ってぶらりと出て来た、詩人アルビオンはまだ若い。これから、恋と詩材とを一緒に探す夜の散歩を始める。右は公園、左はキネマ。どっちに向くかを考えて、立ち止ったついでにネクタイ屋のウインドウに立った。硝子に映る痩身、美貌、一流のダンディである。

ネクタイ屋のショップ・ガール、テレサはイタリア系の美人である。そして、カチューシャ・マースロワのように斜視である。それは妖しくも魅惑的な斜視である。詩人アルビオンは彼女の眼を発見した時に、全身に微弱な電気を感じたように思った。詩人達の言うインスピレーションである。詩藻立ちどころに滾々と湧いて、即興の一句を成した。

奇し、その瞳。
我を見給うや否や。
ほほえむは誰が為ぞ。
知らまほしけれど、
問うもまたうつけし。
心、せちに乱る——。

——まあ、詩！　とテレサは叫んだ。無学で、意味はよく解らなかった。そしてぼいぼいと嬉しかった。だから、はっきりと微笑して正面から詩人を見上げた。詩人は又しても、

（ほほえむは誰が為ぞ）。と、心せちに乱れた。

——あなたは詩人ね。きっとそうよ。私、見ただけで分るわ。

――ええ。僕は毎月曜日の夕刊新聞に詩を書いています。
――まあ！　偉いのねえ。でも、あなたはきっと貧乏よ。だって、詩人は、貧乏にきまっているわねえ。
イタリアアノはけちんぼで、打算的であった。だが詩人は、彼女の眼に心乱れて、却って、（そうだ、俺は貧乏だっけ）と思った。
別れると、公園へ行って、石のベンチに十五分。竜舌蘭の大きな茂みの中に坐った、素っ裸の女の大理石像が、ほのぼのと白く暗がりに浮んでいるのを眺めた。すると、刻々に金がほしくなり始めた。それも、何とかすればすぐに得られるような気がするのだ。
我に富を与えよ。テレサは金色の髪に水色のリボンを巻いていた。あの眼こそは奇蹟だ。あの眼を見ていれば絶え間無しに詩が流れ出るではないか。
ダンテ、バイロンも亦知らざりし、
詩の泉なる、わが青き瞳よ！
（そうだ、富籤を買おう）とアルビオンは思った。
この思いつきは彼を喜ばせた。これこそ、最も手近な、最もロマンティックな方法である。欣然として立ち上ると、細身のケーンをきらきらと打ち振りながら、彼はとっとと街へ引返して行った。

ええ、五万円！
五十万円！　旦那！
当っても気狂いにならぬ御用心。
発表は明後日の午後三時であります。
貴殿！　どの番号にします？
二ミル（約五十銭）たった二ミルですよ。それに五万円が当るんですぞ！
左様、旦那。まあ一割ほど慈善病院に寄附して頂く事になっとりますが、その代りに金を受取った時には巡査が護衛につくし、サンタ・カーザ寄附芳名が新聞に出ますあ。そして四万五千円を只取りですからなあ。ええ、ロテリヤ、ロテリヤ！　いかがですね紳士、一枚。
――七七七七七七七。
ああ！　そいつあ売っちゃいました。良い番号ですからね。どうも土曜日には、ロテリヤは全く売れますからなあ。どうです、これ。八八八八八。
へい。有難う御座います。当りますぜそいつあ、ヘッヘッヘ。
ええロテリヤ！　五万円、セニョール！
夜の散歩は物凄い人出だった。ラルゴ・ダ・セ広場のあたりは、電車も立往生するし、野良犬の命が危ないほ

どの男と女と。昼の左官は夜の紳士に早変りし、昼のタイピストは夜の御令嬢に早変りし、街へ、街へ―　恋を探しに流れ出てきた。晴着の渦、流盻の乱反射、慾情の雪崩。

テレサの俤を中空に描きながら、人波に揉まれ揉まれて、待ちあぐんだ約束の八時、約束のカッフェに行って見る。女は居ない。苦い苦いカッフェのとろりと濃い味を、心を押し静めてしみじみと味わう。

（このロテリヤが当りますように、神様！）

慾望は、必ず成就するものと、アルビオンは信じていた。自信家で、うぬ惚れも強いが、それだけに何事も敢然としてやってのける、謂わば、申し分の無いロマンティスト、聖市人であった。だが、たった一枚のロテリヤでは心細かった。（これがもしも外れたら……）と彼は思った。（全財産を叩き出してロテリヤを買うまでだ）

ほッほッと肩で息をしながら、御令嬢の粉飾を装うたテレサは大急ぎで入って来た。

――待って？　私、暑い。ソーダ水を貰うわ。

店につとめて、人ずれはしているし、イタリアアノの打算的な大人めいた所もあるが、年の若さに、夢も多くて、詩人を今日から友達に持った事が、唯無茶苦茶に嬉しかった。嬉しいと言う事は、それだけ危ないと言う事でもあった。詩人は、彼女の視線の乱れを、彼女の感情の乱れであるように思った。よほど複雑な性格の女性であろうと思った。

――そうしていると、あなたは天使のように美しい。と詩人は誇張して言った。

――そうかしら、私、時には、自分でも、美しいと思うことがあるわ。とテレサは言った。しかし、さすがに斜視が気がかりであったから、こう付け加えた。

――でも、ほんの時々なの。

――僕は、もう少し経つと、うんと金持ちになるんです。とアルビオンは言った。

――そう？　いいわね。

ちらと真面目な眼を向けて、テレサは細長い包みを開きながら言った。

――ちょっと見て下さらない。お店でネクタイを買ったのよ。こんなの、どう？

――やあ、これあいい。僕にくれる？

――まあ！　違うわ。見て貰うだけよ。私の恋人に贈るのよ。

男の心も知らぬげに馴れ馴れしく、女はネクタイを男の首に当てて見た。詩人は首を固くして、むらむらと腹立たしくて、愚弄する小娘を小面憎く思った。

カッフェの夜、虚飾の市は衣裳の華美を尽し、化粧の苦心を凝らして、混血の美しい娘達が、戸口の前を軍隊のように列をなして通る。四分か三分だけの黒人の血の混ったドス黒い娘の頬紅の薄化粧が、どんなにほのぼのとしたエキゾティクな魅力であることか。

あるへんちいなの娘もいい。
いすぱにええろの娘もいい。
いたりああの
ぽうちゅげえざ
いずくの果てを探しても、
娘の居ない里は無い。

そうさ、そうともさー

詩人は金を抛り出してツンと立ち上った。カッフェを出ると、人波を抜け、群れを離れて、ぐんぐんと暗い町へ入って行った。女が足早に追って来て言った。

——ねえ、怒ったの？　何を怒ってるのよ！　怒ったら、わたし、帰るわ。

——ああ帰ってくれたまえ。

道は急な下り坂の頂上で、視界は広かった。正面の晴れた夜空に、ダイヤ形の南十字星が冷たく光っていた。詩人は立ち止るとステッキの先でコツコツと敷石を叩いた。

——あなたに恋人があるとは知らなかった。

——だって……と女は鼻声で言った。だって、それや仕様が無いわ。

——そんな恋人なんか、棄てたらいいじゃないか。

——だって、そんな事無理よ。ひどいわ。

——いいよ。もういいよ。僕あ諦めるんだー

テレサは黙ってしまった。男の激しさに、嵐のように吹きまくられ、心がよろめいた。恋人ジェラルドウの細い八字髭がちらと胸をかすめた。

その時女の顔は闇の中で夕顔の花のように白かった。その白さを目あてに男は不意に抱き寄せると接吻してしまった。テレサは男を押しのけたが、幸いにも間に合わなかった。永い間二人とも黙って立っていた。やがて男の方が先に平静を取り戻そうとして、煙草に火をつけた。すると、それに誘われるように女は眼が熱くなった。

——いけなかったかい？　と男が言った。

女は黙ってネクタイの箱を渡すと、そのまま振り向きもせずに、闇の中にぐんぐんと融けるように遠ざかって行った。足音ばかりがいつまでも聞えた。（これは追っかけない方がいい）と悧巧なアルビオンは思った。そしてパッパッと白い煙を吐いた。火が赤く彼の顔を照らした。笑っていた。

# 花散る時

きく、たん。きく、たん。

夜の雑踏を逃れた裏通り、ジェラルドウは灯影を避けて歩いた。

きく、たん。きく、たん。

ジェラルドウは跛である。テレサと結婚する事にきめたので、先月から髭を生やした。気障な細い八字髭、それだのにテレサは、男のぐらつく肩を支えて歩きながら、どうしても歩調がしっくりと合わない事を悲しんだ。そして昨夜の詩人の事を思っていた。今夜の散歩は味気ない気がした。

——疲れたわ。わたし。とテレサは淋しそうに言ったけれども、その気持は男にまでは通じかねた。

——公園へ行って休もう。と男は言った。

——ああ！　又パルケへ行くの？

口に出してテレサは言ってしまった。会うたびごとにパルケだった。一度として夜の街の賑わいに揉まれながら、離れないようにしっかりと腕を組んで歩く、あの身を疲らせる喜びに浸った事はないのだ。彼は日中と夜の明るい街とを嫌った。一歩ごとに上り下りする帽子と肩と、そして歪んだ足の影が正確に鋪道に映るからだ。彼が真直ぐに立ち上れば、花の都はゆらりと揺れる。彼が正しく正面を向けば、愛する街サン・パウロはどうしても傾いてしまう。

きく、たん。きく、たん。……彼は蝙蝠のようにうす闇に住む。けれどもテレサはもうとっくに闇が胸一杯に詰ってしまったように息苦しい。だから又しても言うのである、吐息のように、はかなげに。

——ああ！　あの、革命さえ無かったらねえ。

そうである、一九三〇年の十月、政党の政争が革命化した時、市街には土嚢が積まれ、パルケには機関銃が据えられた。……その時ジェラルドウは勇敢なる十九歳の兵士であった。愛国心に頬を赤くした、若く、美しく、花の如き少年兵士であった。十七歳のテレサを恋せしめるに足る頼もしき若者であった。……そして、くだらない内乱の勲功によっていつしか、鋪道の暗がりを選んで歩く蝙蝠になってしまった。蝙蝠のように臆病に、むかしの俤も失せて、坐って出来る仕事を選んで、今では靴に飾りミシンを入れること専門の腕の良い職人で、良い給金も取っているが、自分の跛に気が引けて、テレサの前でも始終おどおどとしたジェラルドウであった。それ

がテレサには物足りなくて、今日は殊に男の跛が気に入らなくてむしろ嘲ってやりたい程つまらなかった。そしてほのぼのと、詩人アルビオンの、すらりと細い後姿を思い出していた、唇の感触さえも。

——ねえジェラアル、知らまほしけれど、問うも亦うつけし。……何てこと？

——なんだね、それ。

——詩よ。有名な詩人の詩の中にあるの。知らないでしょう。良いと思わない？

——聞いた事の無い詩だねえ。と男は言った。

——私ね、ネクタイ約束したでしょう。買ったのよ。帰る時にあわてて店へ忘れて来ちゃったの。今度あう時にあげるわ。

ジェラルドウは疲れて、やっとパルケの中の、いつも坐る石のベンチまで辿り着いた。

——明るい方へ行って見ない？　とテレサは坐りもせずに言った。冷たいものが飲みたいわ。

——だって、すっかり草臥れたじゃないか。

——ストッキングも買わなきゃならないの。行ってくれないッ

それ程までに街へ行きたい女の心がどうしても男には通じなかった。却って、彼の方が哀願するように、いかにも辛そうに言った。

——僕あもう歩きたくないんだよ。

パルケ・アニアガンバウは仄暗く、檳榔樹の並木の向うで、噴水の頂が光って見えた。石のベンチに並んで坐ると、街の雑踏がまぢかに聞えて、空は灯を映して真紅だのに、……テレサは胸が疼くほど、あの雑踏の明るい街、ネオンの輝く街が恋しくなってきた。彼女は不確かな視線を上げて、遠い屋根の上に明滅する広告燈を眺めた。しきりに詩人の俤がちらちらした。そして無情にもこう言ってしまった。

——あなたの足、いつまでも、治りっこないわねえ。

連れ出されて、ここは郊外ペンニヤ。赤土の丘陵のうねった間を、太くなり細くなって流れている川に小舟を浮べて、夕焼の赤味の消えて行く西の空を眺めるテレサの瞳は、いつもよりもずっとひどい斜視に見えた。アルビオンは漕ぎ上りながら、ポケットの紙片を女に手渡した。

——好いた男を好いたと言わず、

嫌いでござるー　とそっぽを向いた。

おらがあの子は天の邪鬼。

おらも男じゃ、覚悟がござる。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com